

国立循環器病研究センターにおける潜在的ドナー把握の試み

石垣 理穂¹⁾、小川 真由子¹⁾、竹脇 奈々²⁾、豊田 一則²⁾、藤田 知之¹⁾、
中谷 武嗣¹⁾

¹⁾ 国立循環器病研究センター 組織保存バンク

²⁾ 国立循環器病研究センター 臓器組織提供対策室

【目的】

国立循環器病研究センターでは、2006年より重症者に対する回診（以下、重症回診）を行ってきた。重症回診は、厚生労働省補助金事業「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業」の適応事例かを判断する為に行う、多職種による病棟ラウンド回診であり、近日中または搬入後24時間以内に死亡する可能性が高い入院・初診・通院患者、及び、診療実施の上で倫理的問題を検討する必要がある場合等が対象とされる。2013年7月より、患者や家族の意思を尊重し適切に提供を進めるため、重症回診に臓器組織提供対策室員も参加するようになった。今回、重症回診症例の分析を行い、ドナー増加に向けた院内啓発としての重症回診参加の有用性について考察する。

【方法】

参加開始以降、2014年3月末までに国立循環器病研究センターの重症回診で取り上げられた全症例について、プレゼンテーションで提示された情報を分析し、臓器・組織提供者としての医学的な潜在的適応を分析する。また、コーディネーターが参加することによる、施設や医療従事者への影響についても考察する。

【結果】

103症例のうち胎児・新生児症例を除いた99症例において、何らかの臓器組織提供に対し一次的適応があると考えられた症例は50症例、うち眼球を除いた臓器組織提供に対しては15症例、眼球については35症例であった。重症回診内で提供に関するオプション提示が勧められた症例は6症例、うち眼球・心臓弁・胸部大動脈の提供に至った症例が1症例であった。担当医が提供意思表示について確認するようになり、家族の理解や受入れ状況に関して回診時に検討される機会が増加している。また、コーディネーターに提供に関する問い合わせや相談が寄せられる機会が増加した。重症回診への参加実績は幹部へ定期報告されると共に、臓器組織提供対策室で共有され、意識向上に寄与しつつある。これらの総合的な結果、提供に至る症例発生に繋がったと考えられた。

【考察】

重症回診に参加することにより、施設スタッフへ直接の働きかけが可能となり、提供症例に繋がり、臨床現場で患者や家族の提供意思を尊重する為の準備が整いつつある。今後も重症回診への参加を続け、提供意思のある症例の情報が漏れることなく活かされるよう、マニュアル整備やスタッフの意識の掘り起し等を行い、具体的な行動目標を共有し実践していく必要があると考える。

Key Words

1. 潜在的ドナー

2. オプション提示

3. 施設啓発